

Title	獣皮を被る人
Author(s)	井本, 英一
Citation	大阪外国語大学学報. 77 p.99-p.109
Issue Date	1989-03-20
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/81224
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

獣皮を被る人

井 本 英 一

応神天皇13年9月の記録に、一説として次のような伝説をあげている。日向の諸^{もろかたの}県^{きみうし}君牛は年老いたので朝廷を致仕し、古里に帰った。彼は自分の娘を天皇に献上しようと思って播磨国に行った。そのとき、天皇は淡路島に狩猟に出かけていたのであるが、西の方を望見すると、数十匹の大鹿が海を泳いで来て加古川の河口に入った。天皇が人を遣ってしらべさせたところ、これらの鹿は人間で、角のついた鹿の皮を被っていることが明らかになった。天皇が、それは誰であるかとたどしたところ、それは諸県君牛で、自分の娘を献上しようとしているのですとのことであった。天皇はよろこんで娘を召し寄せ、船に仕えさせた（『日本書紀』）。

この伝承は説話であるが、古い習慣を物語っているようである。すなわち、古くは、天皇に娘を貢上するときは、その一族の者らはすっぽりと獣皮を被って伺候したのではないかということである。獣皮を被る者たちは、自らをいったん祖先の姿に戻し、祖先の国からの献上物として娘を差し出したのであろう。

このような獣皮は通過の際に用いられるもので、古くは日本神話の天照大神の条にも見られる。大神が忌^{いみ}機^{はたの}殿^{どの}で神御衣^{かむみそ}を織っていると、スサノオノミコトが天の斑駒^{ふちこま}を逆剥^{さか}ぎにして、屋根に穴を開けて下に投げ込んだ。大神は身を傷つけ（死んで）天の岩屋戸に隠れてしまったので、世の中が真っ暗になった。神の死と再生の通過の時点においても、このように獣皮が出現する。ここで、逆剥^{さか}ぎといっているが、それはどんなものであったのだろうか。剥^はぎ方はどんな場合でも、始点が違えば相対的に逆剥^{さか}ぎになるであろうが、そのような意味でいったのではなかろう。例えば、狩人が熊や鹿や羚羊を殺して皮を剥^はいだあと、死体に対して毛を内側に皮を掛けてやる毛祭りとか毛ぼかい（寿い）がある。これは、あの世に送る動物が、逆さの世界でもういちど骨に肉を付けて生き返り、人間に食糧をもたらしてくれるようにとの願いであろう。人間の場合は、屍衣を裏返しに着せる。これも、あの世はみんな逆だというほかに、あの世の側から見て、衣服をつけることによって再生するという意味があったのだと思われる。

皮革の衣服と布の衣服とは、場合によっては同一の効果があると考えられた。天照大神の死の直前に獣皮が出現するのを見たが、このような現象は古代西アジアでも広く見られた。エジプトのリビアのアテナ女神の再生に皮衣を掛けた習慣やテーバイのゼウス像に獣皮を掛ける習慣があったことが、ヘロドトス『歴史』4.188や2.42に見られる。仏像には皮革を掛けることはまずなくなったと思われるが、衣服や布を掛ける習俗として残った。越前国の敦賀の女が観音を信仰していたが、

身内も死にはてて1人になり、わびしい生活をしていた。ある日、数十人の伴の者をつれた男性が一夜の宿を乞い、2人は男女の契りを結ぶが、みなをもてなすのにどうしてよいか分からず困惑していた。そのとき、亡くなった両親が使っていた女の娘と名乗る者が現れ、万端ととのえてくれた。女はお礼にこの女に紅の袴を与えた。女が男とこの地を離れることになったので、最後の見納めに観音に詣ると、観音の肩に自分が手伝いの女に与えた紅の袴が掛かっていた（『今昔物語集』本朝部、巻十六、第七）。ここでは、女が結婚して男といっしょに他処へ移動するというときに、観音に布（紅の袴）が掛けられている。説話では、観音が女の信心に応じて手伝いの女に化身したことになる。この種の話の変形は、巻第十六の第九にも見られるが、ここでは女が形見に与えた髪の毛が観音像の指に巻かれていた。毛髪は布ではなく、身体の一部であるので、皮に類すると考えてもよい。

西国三十三所札所の革堂こうどうの由来譚は次のようになっている。寛弘2年、京に遊んだ行円上人ぎょうえんしやうにんが、夢の告げにより、賀茂の神祠の傍にある槻の木で、身の丈8尺の千手観音を刻み、行願寺を建ててそこに安置した。この寺は、行円上人の願で建てられたので行願寺という。上人は革ごろもを着ていたので皮上人かわうへといわれた（『京童』巻第三、革堂、『日本名所風俗図会』7、角川書店、昭和54年所収）。ここでは、前例のように、観音像に布や毛が付けられるのではなく、千手観音像を彫刻した僧が革衣を被っている。行円上人が寺を建てた11世紀初頭には、僧が獣皮を着ることはタブーとなっていたと考えられるが、上人はこれを着ていた。観音像は、布や毛皮をその上に掛ける古い伝統をもっていたらしい。

観音は「岩から生まれる神」としての特性を共有する仏であった。観音霊場にはいずれも岩場がある。そこを台座にして観音は立つのである。古代の西アジアには、いけにえの皮を石に被せる儀礼があった。フェニキアでは雄鹿あるいは羚羊を犠牲にし、その皮を身にまとい、その血を神聖な石の前に注いだ。このような聖石はもともと神聖なのではなく、その中に神が住まうことを同意したために神聖とされたのである。このような石には血をかけるだけでなく、犠牲獣の皮を被せた（W.R. スミス著、永橋卓介訳『セム族の宗教』後編、岩波書店、昭和18年、144、340-2頁他）。観音は岩から生まれる仏であるので、その像に衣や皮（毛）を掛ける伝統があったのであろう。メッカのカアバ神殿にキスワと呼ばれる布を被せたり、釈迦が袈裟を洗って石の上に拵けて干したところ、袈裟型の文様が石に残ったという濯衣石の伝説などについては別の所で論じたことがある。

布と皮は古くは同じように見られていた。エレウシスの密儀の志願者が秘密の伝授を受けるときに着ていた衣服は、永年の間、保存され、神聖な力があるものと信じられていた。密儀には全裸で参加したが、初めて与えられるのは、獣皮であった。そのあと聖別された法衣が与えられた。儀式の進行中、志願者は2つの門を通過した。最初の門をくぐると道は下り坂になっており、次の門は登り坂になって、光明の部屋に達し、その中には穀神ケレスの像があった（マンリー・P. ホール著、大沼忠弘・山田耕士・吉村正和訳『古代の密儀』人文書院、1980年、120-1頁）。裸体に獣皮をつける意味は、まずかつてはトーテムであった獣の皮に接触することによって新しい生命力を獲得

することであった。そのあとで衣服を着たのである。したがって、この衣服にも神聖な力が宿るとされた。この入門式が死から再生への通過儀礼であったことは、門をくぐる象徴的行為から見ても明らかである。志願者は、先祖の世界のこと、神話、世界の創造、動植物の生と死の秘密を聞くのであった。古代インドでは、^{がくしゅう}学生入門式でそのカーストに応じて、上衣として黒羚羊、ルル、雄山羊の皮を、下衣服として大麻、亜麻あるいは羊毛でつくられたものを著した（『マヌの法典』田辺繁子訳、岩波文庫、1953年、46頁）。古代インド人は、その子に男子を得て年が老いてくると、林棲期に入った。彼は妻を子に託し、あるいは妻を伴って森林に入っていったが、獣皮と樹皮をまとい、朝夕に沐浴した。体毛やひげ、爪は伸ばし放題であった（前掲書、167頁）。爪やひげを伸び放題にし、獣皮を身につけることは、死者と同じ状態であった。死者はこのような状態で再生に向かうのであった。獣皮と樹皮をまとしてトーテムの世界に生まれ変わるのが古い意味であったと考えられる。

インドの^{がくしゅう}学生は、入門に際して皮の衣、聖紐、帯、杖、下着を用意するが（前掲書、64頁）、日本の山伏の服装に類似したものが見られる。山伏十二道具のうちの^{ひつしぎ}引敷は、鹿や熊や兎の皮などの毛皮にひもをつけた小さな敷物で、腰に縛りつけ、皮を尻に当てるようにする。そのほか、先端に金属の輪のついた金剛杖や、山伏十六道具に入っている^{はしりなわ}走縄がある。これらの山伏の道具は、修験道でその由来が説明されている（宮家準編『修験道辞典』東京堂出版、昭和61年、各項目）。これらの服装一式は峰入りのためのものである。峰入りは、あの世に入ることであるので、死の世界に入る入門式でもある。古代インドの学生入門式の服装と、山伏の峰入りの服装は、死の世界への参入のための服装である。山伏の道具の1つである頭巾も一種の呪物であったと思われる。20世紀初頭まで残っていたトラキア地方のカーニヴァルで演じられた劇は、死と再生を再現するものであったが、役者たちは頭からすっぽりと山羊皮を被り、体の下に脚の部分の皮を垂れていた。肩には小鹿の皮を掛け、腰には羊の鈴をつけていた（J.G. フレイザー『金枝篇』第5部『穀物と野獣の靈魂』第1巻、ロンドン、1912年、26頁）。獣皮ですっぽりと身体を覆うと、あの世の人となると考えられたので、俗世間の目からは見えなかったようである。アラビア・ペルシアにもこのような頭巾の伝統があった。バスラのハサンは、川べりで2人の小さな兄弟が1本の銅の杖と三角形の皮を張り合わせた頭巾を自分のものにしようとして争っているのに出会った。ハサンは子供らを騙して頭巾と杖を手に入れた。これらは魔法使いのもので、頭巾を被ると他人に目には見えなくなった（バートン版、大場正史訳『千夜一夜物語』6、河出書房、昭和42年「パッソラーのハサン」121頁）。

この皮はいわゆる隠れ蓑で、これを被ることにより異界に参入したのである。おそらく、藁でつくった蓑笠以前の皮衣が最初のものであったと考えられる。獣皮を被って、完全にその動物になりきることは、人間そのものの存在を消すことになる。北欧神話のササノオともいえるロキは、主神オーディンと同じように、いつでも他の者の皮膚の中にもぐり込み、他のものの形をとることができた。また、彼は瞬時に姿を消すことのできる靴をもっていた（ルードルフ・フェルトナー著、木村寿夫訳『ヴァイキング・サガ』法政大学出版局、1981年、194頁）。山伏の道具の1つに草鞋があ

るが、それは単なる歩行の道具ではなく、ある種の呪術性をもったものであった。ここではロキは人や獣を殺してその中に隠れるのではなく、生きた人獣の皮膚の中に隠れるのである。

蛇に呑み込まれようとした蛙を助けたことにより、蛙が化けた老婆から娘は姥皮^{うばかわ}というものをもらう。姥皮を被ると娘は醜い女に変身するが、皮を脱ぐと美しい女に戻る。彼女は長者の家の火焚き女として雇われるが、そこの息子と結婚して幸福になる。日本の場合、その前に父が蛇に娘をやりと約束する話がある。蛇は美しい男になって娘を迎えにくる。しかし、ここでは、皮を脱いだりするモチーは見られない。朝鮮の民話では、蛇は皮を脱ぎ捨てて、美しい若者になって娘と楽しい夜を過ごし、翌朝、再び蛇の皮を被りもとの蛇の姿に戻った（北嶋静江訳「朝鮮の民話」『世界口承文芸研究』大阪外国語大学口承文芸研究会、1984年、264-5頁）。イランの民話には次のようなものがある。ある娘が家庭教師の恋から逃れ、羊飼いの番犬を売ってもらい、その犬の皮を剥いで犬に化ける。ある街に着いて、犬の皮を脱いで娘の姿になり、水浴しているところを王子に見られ、求婚されて結婚する（A. アンジャヴィー『イランの民話』第1巻、テヘラン、1978年、79頁以下）。その他、イランには次のような民話がある。ある漁師の網に馬がかかる。漁師はこの馬を大切に飼育する。馬は漁師に末娘と結婚させてくれとたのむ。漁師は娘を馬に与える。馬は夜ごと、皮を脱いで美しい若者の姿になり、娘と時を過ごした。この馬は、妖精の国の者で、故あって馬の姿となって地上にやってきたのであった（小沢俊夫編、鈴木満訳『世界の民話』中近東、ぎょうせい、昭和52年、75頁以下）。『ペロー童話集』（新倉朗子訳、岩波文庫、1982年）所収の「ろばの皮」では、美しい王女がろばの皮で身を覆って正体を隠すが、最後に王子に見染められて結婚する。南米のチャコ・インディアンの間では、新婚の夫婦は雌馬あるいは雄馬の皮の上に頭を西に向けて寝る。それは太陽光線が足にあたって花嫁が妊娠するためである。イランでも中央アジアでも、太陽光線を花嫁の足にあてる風習が今でもある（フレイザー『金枝篇』第7部『美男ボルダー』第1巻、ロンドン、1913年、75頁）。このような例が示すように、獣皮を被ると変身するわけであるが、別の見方をすれば、自分の姿を消すことでもあった。これらの話では、いつまでも人間であって欲しいという願いから、蛇や馬の皮を焼き捨てるというモチーフが入っている。『グリム童話集』（5）金田鬼一訳、岩波文庫、1979年に収める「泉のそばのがちょう番の女」（KHM 179）は次のようになっている。王の三女は美しい娘であるが、姥皮をつけると全く他人の目から見えなくなる。娘が姥皮を脱いで美しい姿で泉の水で体を洗っているのを伯爵に見染められるが、皮を被って姿を消してしまふ。しかし、最後には伯爵と結婚して幸せになる（54、56頁）。ここでは皮を被ると身体が見えなくなるので、隠れ蓑としての特徴がよく出ている。

一般に獣の姿をしたものは、そのままの姿で人の目には映った。しかし、皮の下には人間がいた。『グリム童話集』（4）、「ろばの若さま」（KHM 144）では、子どもができなかった妃が、ろばを生んだ。ろばは大きくなって結婚するが、花嫁と寝室に入るとろばの皮を脱いで美しい若者となる（177頁以下）。世界的に分布する羽衣説話も同じで、水鳥が池に飛来し、羽衣を脱ぐと美しい乙女になり、そのうちの1人は男に見染められて羽衣を隠されて結婚することになる。ベトナムには次

のような伝説がある。ある男が道に迷い、仕方なくほら穴に入って夜を過ごした。そこに90頭の虎がやってきたが、虎の皮を脱ぐと人間となった。男もいるし、女もいた。男は1人の娘に目をつけた。娘が脱いだ虎の皮を隠し、娘と結婚した（富田健次「ベトナム少数民族タイ族の民間伝承文学」『世界口承文学研究』第3号，1982年，346頁）。『グリム童話集』（3）「黄金の子ども」

（KHM 85）では、黄金の魚を釣ってそれを海に帰してやった漁師に2人の黄金の子どもが生まれた。そのうちの1人は、自分が金むくなのを隠すために熊の皮を被る。この子はある美しい少女と結婚することになるが、新婚の床で熊皮を脱ぐと美しい若者となった（53頁以下）。皮を被ることと結婚とは互いに関係のあることであった。『グリム童話集』（2）「千びき皮」（KHM 65）には次のような話がある。王の妃が亡くなり、王は妃とそっくりの自分の娘と結婚したいという。娘は父親に千匹の獣から少しずつとった毛皮で衣をつくってくれるようにとたのむ。王はこの難題どおりの千匹皮をつくってやる。娘はこれを着て顔と手を墨で汚して逃亡する。彼女は、別の王の宮殿の台所でかまどの番などをさせられる。しかし最後には正体が分かり、こちらの王と結婚して幸せになる（302頁以下）。千匹の獣の皮でつくった衣は、まだらの衣で、それ自体で境界性を示していた。このような衣服を着て、最近親婚（この話では実現しなかったが）や一般の結婚を行った。ここでは、あらゆる動物の毛皮を身につけることにより、それらの動物の世界に参入し、魂を一巡させてまた人間の姿に戻り、いわば「よみがえり」を行うことにより、結婚を完了したのである。中国には天鵝絨^{てんがじゅう}という衣があるが、これは鳥からつくるもので、タカの腹、ガンの脇の細毛1万匹分からやっと一枚の衣服ができるといわれる（宋応星撰、戴内清訳注『天工開物』平凡社，1969年，61頁）。アフリカのバトンガ族の間では、いところ同士が結婚するとき、2人は山羊皮に穴を開けて、その中に頭をつっ込み、近親婚の穢れからのお祓いをする（ERE, X, p.466, セリグマンの報文から）。アフリカでは、儀礼において皮を着せたり皮製の腕輪や足輪を用いるが、これらは毛皮を被ることと同じ意味をもっていたと考えられる。

中国では獣皮を付ける習慣が宮廷の行事に採り入れられ、正月を中心とする儀礼の中にそれが定着した。清朝末期の北京の年中行事記である敦崇『燕京歳時記』（小野勝年訳，平凡社，昭和42年）には、この関係の記事がいくつか見られる。元旦，神迎えをしたあと，王公から百官に及ぶまで，朝廷に至り，天子に拝賀しなければならない。貂の皮をつけた高官の衣服や，うわばみの文様を刺繍した官服を着用した人が道路を行き交う（3頁）。正月19日には，貂の衣服を着用できる者はこれを脱ぎ，白狐の皮が裏についた上衣を着用する（26頁）。正月19日は，小正月の最後の日であったと考えられる。そこで貂皮を脱いだのであろう。この皮衣服は前年の冬至月（旧11月のこと）1日に一斉に着用した（206頁）。冬至月に着用し始めたというのは，古い冬至正月の行事の名残であると思われる。

中国では周代以来，熊皮を被り，12獣をひきいる四つ目の方相氏が見られる。方相とは四つ目の位置が四角を形成するかららしい（段成式著，今村与志雄訳注『酉陽雜俎』2，平凡社，1980年，293頁）。方相氏は，この世からあの世へ移行する死者の柩の先頭に立つ，境界に出現する獣皮を被っ

た人間で、死者の魂そのものであったとも考えられる。前掲書は、方相氏の頭は亡き人の魂気を残しておくためのものであると述べている。方相氏は、その他、追儼に出現する。追儼は大晦日の夜の鬼やらいの行事であるが、それが立春前夜の節分に行われたのを見ると、年の変わり目に方相氏が登場するのが分かる。方相氏が12獣を連れているのは、死者の魂が各種の獣の中を転移するという信仰があったからだろうと思われる。ヨーロッパでは、クリスマス前夜、若者らが熊、狼、山羊、牛などの毛皮を被ったり、仮面をつけて家々を祝福してまわった。スコットランドのハイランドでは、大晦日、雌牛の皮をつけた男が、杖に生皮をぶらさげて家々を訪問した。人々はこの男を打つことによって新年を迎えた（J.G. フレイザー『金枝篇』第5部『穀物と野獣の霊魂』第2巻、322-3頁）。古代インドの再生儀礼では黒羚羊の皮が用いられた。『アイタレーヤ・ブラーフマナ』（1. 3）によると、祭官らは潔斎を受ける者を胎児に変える。彼らは彼を小屋に入れる。小屋は母胎である。彼らは衣を以て彼を覆う。衣は羊膜である。その上に黒羚羊の皮を被せる。胎膜は羊膜の上にある（M. エリアーデ著、風間敏夫訳『聖と俗』法制大学出版局、1969年、188頁）。ここでは、衣服や獣皮は胎児を包む膜にたとえられているが、これも古い考え方の1つである。獣皮を被るのは、獣そのものになることと、胎児として胎膜に包まれる両方の意味を兼ねていたのであろう。日本では、正月には獅子舞いが訪れた。その頭部は、獅子であることが多いためにそう呼ばれるのであるが、龍、鹿、猪などの頭部もついていた。子供は、獅子の口に頭を咬んでもらうのが厄払いになるとされた。獅子舞いの元の姿は、新年に獣皮を被って訪れてくるトーテム獣であったと考えられる。いっぽう、葬儀では、竹で編んだ竜がしらが葬列の先頭に行くが、この中に死者の魂が入っていると信じられている。イランでは、立春の前日や春分の前日つまり大晦日に、あごひげの薄いクークと呼ばれる道化が、黒い山羊皮を被って現れる。これらのクークは花婿と花嫁の姿をしており、服装は羊飼いのそれである（浜畑祐子『春祭考』『オリエント』第26巻、第1号、日本オリエント学会、1983年、63頁）。この道化は男女1対で出現するが、日本の獅子舞も雌雄1対で現れるので、単なるお祝いのために各家を訪れるのではなく、生殖や豊穡の目的もあったのである。イランでは、元来もっていたであろう意味は久しく失われてしまったので、何のために獣皮を被るのか理解されないようであるが、方相氏や獅子舞いと同類のものであったことは間違いない。アフリカの諸民族の間では、獣皮を被る儀礼はきわめて多い。すべて、このような場合、死と再生の演劇化といえる。南アフリカに住む少数民族であるボンド族は、初物の収穫祭で獣皮を用いる。祝祭中、混沌状態がつづき、無法が横行し、秩序を保つ権力者はだれもない。あらゆる種類の騒音がかもし出され、家来は王をののしる。このような儀礼的な無秩序のあと、王は職務を再開する。1人の勇者が王の前に呼び出され、獣皮を着せられる。このとき、王は祭りの終わりを宣言し、サツルナリアは終わり収穫祭が始まる（J. マクドナルド師『宗教と神話』ロンドン、1893年、136-8頁）。

コンスタンチノーブル（イスタンブル）とアドリアノーブル（エディルネ）の中間に位置する古代のトラキアの首都ヴィザでは、20世紀初頭まで古代の死と再生の演劇が伝承されていた。劇に出演する役者たちは山羊皮や小鹿皮を身につけ、弓や男根を手にしたり、老女に扮した男が手に箕を

もち、その中に小児の人形を入れていた。この劇が演じられる日、獣皮を着た人が各家の戸を叩き、パン、卵、金銭などを集めて廻った。獣皮人は2人から成り、1人は女装して踊った。これと同時に、ジブシーの夫婦がみだらな仕草でパントマイムを演じた。このあと、獣皮を被った男は結婚するが、彼は仲間に弓で射殺され地上に倒れる。妻をはじめ、仲間の者たちが号泣するなかを葬式がいとなまれる。このとき、死者は突然蘇生し、ここで劇は終わる（フレイザー『穀物と野獣の靈魂』第1巻、26-8）。この祭りと似た祭りでは、獣皮を被った者は王と呼ばれ、祭りのあとは獣皮を剥がれて川に投げ込まれる。彼は平常服に戻り、祭りは終わる（前掲書、28-9）。イランの新年に出現する黒い山羊皮の人物や、トラキア伝来の同じような人物は、あの世から訪れてくるトーテムを表していた。ギリシア世界では、穀物とブドウの神であるディオニュソスは、その像が山羊の姿をしてブドウ畑の中に立っていたり、像に山羊の皮が掛けてあった。新年に人間世界を訪れてくる豊穡の神は、人間が獣皮を被って演じたのである。

李朝時代の武官の衣服には、胸もとに虎の模様が刺繍してあり、武官を別名「虎班」と呼んだ。文官には鶴の模様が刺繍してあった（金思煒『朝鮮の風土と文化』六興出版、昭和55年第3版、306頁）。武官と文官によって獣と鳥の区別があったが、これは明らかに中国の影響であった。中川忠英著、孫伯醇・村松一弥編『清俗紀聞』1、平凡社、1966年によると、文官は鳥、武官は獣を刺繍するが、品級によってそれぞれの種類が定まっており、一品以下、白鶴、錦鶏、孔雀、雁、白鷺などの順になっていた。武官の場合は、一品以下、麒麟、獅子、豹、熊、彪（^{ひょう}小さい虎）のような順になっていた（159-60頁）。朝鮮の武官服には虎を刺繍したが、当時、朝鮮には虎が多く棲息し猛威を揮っていたからであろう。

武人が虎や獅子や豹などのような猛獣の刺繍を付けたのはよく分かる。ヘロドトス『歴史』によると、ギリシアのヘラクレスがスキュティアに来たとき、酷寒に見舞われたのでライオンの皮を被って眠ってしまった。すると、軛からはずされて草を食っていた馬が不思議にも姿を消したという（4.8）。ギリシア神話では、ヘラクレスの十二功業の最後のそれは、ライオンを狩って、その皮を被り、ケルペロスを退治して、それを地上に連れ戻ることであった。あるいは、このライオン狩りは50日間つづいたが、その間、50人の王女が毎夜1人ずつヘラクレスと寝て、ヘラクレスの子をもうけようとした（高津春繁『ギリシア・ローマ神話辞典』岩波書店、1960年、236頁）。ライオンの皮は、相手をひるませるためと考えられたであろうが、ヘラクレスが50人の王女と寝ていることを考えると、ライオンの皮は結婚ともつながるように思える。スキュティア人は敵の首級の皮で衣服をつくったり、敵の右腕の皮を爪ごと剥いで矢筒の被いをつくる。さらに、全身の皮を剥がして板に張り延ばし、馬上に持ち廻るものも少なくない（ヘロドトス『歴史』4.64）。人間の皮も勇猛な敵の皮であれば、獣皮と同じように強力な靈魂を内蔵していると考えられた。さらにヘロドトスはいふ。カスピオイ人は獣皮をまとい、弓と短剣（アキナケス）をたずさえて出陣した。パクトュエス人も獣皮をまとい、独特の弓と短剣をたずさえて戦いに出た（7.67）。戦場は死体や血で穢れる場所である。そこに獣皮を着て行くのは、自らをさらに穢す行為でもあった。人間は穢れるこ

とによって再生することができた。

『アラビアンナイト』の「バスラのハサン」に出る話では、拝火教徒バフラムが1頭の駱駝を殺してその皮を剥ぎ、ハサンをその中に入れて縫い込み、菓子と水の入った皮袋を入れた。すると1羽の禿鷹が飛来してハサンをわしづかみにして飛び上がり、山頂まで運んでそこにおろした。ハサンはナイフで皮を切り裂いて外に出て、バフラムが求めたものを見付けて下に投げてやった。拝火教徒バフラムは、さらにまた、別の回教徒を駱駝の皮の中に縫い込もうとした（バートン版、大場正史訳『千夜一夜物語』6，河出書房新社，昭和42年，18-23頁）。このモチーフは古代西アジアでは普遍的に用いられたもので、『アラビアンナイト』には別の個所でも使われている。「荷かつぎ人足と乙女たちとの物語」で、第3の托鉢僧は次のように話している。左眼のない老人たちの1人が1頭の羊を連れて来て一同でこれを屠り、その皮を剥いだ。その皮の中に托鉢僧を縫い込んだ。するとロク鳥（禿鷹）が飛んで来て山の頂まで運んでゆきそこにおろした。彼はナイフで皮を破って飛び出したので、鳥は怖れて飛び去った。そこで彼は歩いて行くと大きな宮殿に達した。彼は同じように、ここでその左眼を失ってしまう（マルドリユス版『千夜一夜物語』1，岩波書店，1982年，212頁以下）。このような習慣は、人間に生の獣皮を被せる習慣があったことをその背景にもっている。別に論じたように、古代西アジアでは、死体を獣皮で包む葬法があり、それは現代にまで伝えられている。ことに、臨終の人を犠牲獣の生皮で包む習慣は、上例と同類のものであると考えられる。

古い時代から、人間を獣皮で包む意味が忘れ去られ、ただの忌まわしい行為と考えられていたようである。ろばの臓物を抜き取り、腹のまん中に娘を裸にして縫い込み、顔だけ外へ出させて、どこか尖った岩の上に置いておき、太陽の熱にさらした。ろばは死に、娘はうじ虫に体じゅうを食い裂かれ、野獣に引き裂かれる。その間、ひどい臭気に鼻を責めさいなまれ、暑さとひもじさで死ぬまで餓鬼の苦しみを受ける。その上、自由な手で自殺を企てることもできない（アプレウス作、呉茂一訳『黄金のろば』上巻、岩波文庫，1956年，189-90頁）。ローマでは親属殺人者は鞭で打たれたあと、革袋に入れられ、その口を縫いつけられて川に投げ込まれた。袋の中に生きた犬・猿・蛇などを入れた（前掲書，113，184頁）。これが『ユスティニアヌス法学提要』に挙げられたローマ法の刑罰である。『プルターク英雄伝』（河野与一訳、岩波文庫）によると、フェライのアレクサンドロスは残忍な独裁者で、人間を生きたまま埋めたり、猪や熊の毛皮で包んで猟犬をそれに嘯しかけて引き裂いたりした（「ペロピダス」29）。イランでは、マニ教の開祖であるマニはバフラム王によって殺され、その皮は剥がされて、中に草が詰められ、グンディシャープールの門に吊るされた。その門は「マニ門」として知られる（アル・ビールーニー著、ザハウ訳『古代諸民族の暦法』ロンドン，1879年=1969年，191頁）。『シャーナーメ』によると、バフラム1世は、マニの皮に乾草を詰めて、都門に吊るすか、病院の外の壁に吊るすかせよと命じた。すると、人々はそのようにした（C.1454）。ベトナムの民話にも、生皮を剥いでその中に糠を詰め、城門の前に曝す刑がある。ここでは、3日間ずつ人びとに振る舞うことを王と誓約したが、それに敗れたために男は処刑

されて全財産を没収される（富田健次訳「ベトナムの伝承文学」『世界口承文芸研究』2，1981年，308-9頁）。春秋末の呉越興亡のとき，呉王夫差の忠臣となった伍子胥は，夫差が越王勾踐をゆるすのを諫めて殺されることになったが，死に臨んで「私の墓の上に梓を植えて欲しい。やがて成長して呉王の棺桶をつくるために。私の眼をえぐって，呉の東門の上に置いて欲しい。越が呉を亡ぼすのを観よう」といった。夫差は伍子胥の忠告を聞き入れなかったため，越に敗れ，自殺した（司馬遷『史記』「呉太伯世家」）。城門に眼だけを置いたのではなく，剥いた皮とともに曝したのであろう。

獸皮が刑罰のために用いられたという証拠は，古代エジプト時代からあった。「アニのパピルス」その他から採った『死者の書』の第72章は，死者が拷問室（メスケット・チェンバー）に再生することから救うための呪文である。メスケットというのは，もとは死者を包んで埋葬した雄牛の皮のことであった（石上玄一郎『エジプトの死者の書』人文書院，1980年，139頁）。『マヌの法典』には，牛殺しの大罪を犯したものが行ふ贖いが述べてある。彼は剃髪し，殺した牛の皮を被り，最初の1か月間は大麦の煎汁を飲み，牛舎に住まなければならない。次の2か月間は，感官を制して牛の尿に浴し，各4回目の食事時に，塩を含まない少量の加工した食物をとらなければならない。日中は牛に従い，夜は彼らに奉仕し，礼拝しなければならない。彼は盗賊や虎などから牛を守らなければならない。雨風のときも彼は牛を守らねばならない。牛の殺害者は，このように牛に奉仕することによって，3か月ののち，その罪を除去される（第11章，109-16）。この場合は，殺害者は，牛皮を被って贖罪させられたのであって，再生とか拷問のような厳しい刑罰を科せられたわけではない。牛の聖性に対するある種の怖れがあったらしく，これは古代インドに限ったことではなかった。鹿児島県の百姓何某という者が，牛の生皮が高く売れると聞き，牛を生きながらに皮を剥ぎとった。その苦しみなくこと，たてようもなかった。剥ぎ終わってその皮を売ろうとしたが，だれも買い求める人もなかった。このことが，城主に聞こえ，百姓何某は刑を加えられた（橘南谿『西遊記』巻之一）。この場合，男を牛の皮に包んだことは見えないが，そうした可能性は十分ある。日本では畜生扱いにされるという意味が加えられたであろう。牛，ことに雄牛は，古代人にとっては生殖力の象徴であったので，そのような貴重な存在を殺害することはタブーであったに違いない。それは宇宙的秩序に反することで，一族を食糧危機に陥れることになる。やがてそれは雄牛に限定されないで，牛一般になったのであろう。

中国では，神判に敗れて穢れを負うものを鵠夷という革袋に入れて江海に流した。鵠夷とは馬革であるとも牛の皮であるともいう。楚の国を逃れて呉に亡命した伍子胥は，呉王夫差を助けて覇業を成就させたが，前述したように，夫差が越王勾踐をゆるすのを諫めて殺された。夫差はその死体を鵠夷に入れて大江に投じた（白川静『中国古代の文化』講談社，昭和54年，119頁）。人間を皮に包むためには，馬，牛，ろばのような大型の獣の皮を必要としたことはいうまでもない。中国の話では，この皮は刑罰のために用いられている。ヨーロッパでも罪人は牛の皮に入れられた。例えば放火者は牛の皮に包み，火の傍3歩の所に置かれた。四つ裂きの受刑者は，籠または牛の皮に

入れて刑場に曳きずられていった。父親殺しや溺死刑を受けるものは、犬・めんどり・蛇・猿といっしょに牛の皮の中に入れられ、川に流された(阿部謹也『刑吏の社会史』中公新書、昭和53年、84、89頁他)。牛、馬、ろばの皮に人間を包む習慣、ことに雄牛の皮に包む習慣は、人間を再生させるものであったと考えられるが、はやい時代から、それは人間を刑する方法とされたようである。

蚕は中国では竜精と呼ばれたが、その発生説話に竜馬の皮が登場する。父親が出征し、一人娘が家に残るが、ある日、娘は戯れに馬に向かって、父を連れ戻してくれたらお前と結婚してあげるといふ。馬は父を戦場から連れて帰る。その後、馬は娘を見ては喜んだり怒ったりした。娘から事情を聞いた父は家門の恥であるとして馬を殺し、皮を庭に干した。その傍で娘は遊んでいたが、その皮を踏んで、畜生の分際で人間にいい寄るから、こんなことになったのかわ、といい終わらぬうちに、馬の皮は娘を包んで飛び去った。数日して、庭の大木の上に娘と馬の皮が発見された。どちらも口から糸を吐き出ししていた。これが蚕の起源である(干宝著、竹田晃訳『搜神記』平凡社、昭和39年、266-8頁)。この場合は、蚕が馬の皮に包まれた娘から発生したことになる。空中を飛翔する天馬の子である蚕は、女性原理ではあるが竜精に違いはない。これは日本の東北地方のオシラサマの祭日に、イタコが唱える「おしら祭文」と無縁ではない。両方の場合とも、馬と人間が結婚し、その結果が蚕であるということになっている。アプレイウス『黄金のろば』では、娘が裸にされてろばの生皮の中に首だけ出して縫い込まれる刑罰のことが見られた。その根元には、『搜神記』や「おしら祭文」に見られるような蚕の発生の説話はないにしても(蚕は東方からシルクロードを通して西方に移動した)、女神の誕生の儀礼があったことはいい得る。娘を馬の皮の中に包むことから考えると、蚕と女神が同一視されたいことが分かる。

ここでは蚕は文化英雄によって人類に与えられたとはいっていないが、異界からもたらされたものであることは明らかである。本来は文化英雄が人類に与えるものであった。フェルドウシー『王書』の最初の王はガヌーマルスで、30年間イランを支配したが、最初山に住んでいて、その家来もみな豹の皮を身にまとっていた。彼のもとで人間生活のあらゆる便宜がつくり出された。家畜も野獣も彼の前ではおとなしくなり、人は彼の玉座の前では祈りのときのようにひれ伏した(V.14。黒柳恒男『ペルシアの神話』泰流社、昭和55年、岡田恵美子『ペルシアの神話』築摩書房、1982年に抄訳がある)。英雄ロスタムは、虎の皮を胸あてに付けていた。寝るときは、胸の虎皮を外して王者の兜を脱いだ。彼は敵将アフラシアーブに向かってゆくとき、虎皮を身につけ、巨大な象に跨っていた(フェルドウシー著、黒柳恒男訳『王書』平凡社、昭和44年、106、111、119頁)。麻や木綿が用いられる以前は、みな毛皮の衣服を用いたと考えられるが、毛皮の衣服には、ある種の呪術性があったと考えてもよいであろう。つまり、始祖王やその家来はトーテムの姿をとり、王や英雄はだれでも戦場に出かけるときは、皮を身体につける。ヘロドトスが、カスピオイ人らが戦場に出るとき獣皮をまとうといったのと軌を一にする。シベリアのシャマンが常に毛皮の衣服を着ていたのは、イランやカスピ海の文化と同じ文化に根ざすものと考えられ、始原の状態をそのような姿で再現したのである。このようにして、シャマンは異界と現世の中間に位置して、媒介者としての

機能を果たしたのであろう。

原始的な世界では、獣皮を被ることによって、その獣類に仲間入りすると考えたようである。旧石器時代の絵画を見ると、武器を持った人間が獣皮を被り、本物の獣といっしょに描かれているが、狩猟方法の発生でもあり、食糧を入手するための儀礼的殺害行為でもあったと考えられよう。ブッシュマンをはじめ、アフリカの諸民族が遺してきた多くの壁画にもこれに類するものがあるし、現実には、狩猟の獲物動物の毛皮を被り、その動物の行動をまねて彼等に近づき狩猟する。人間は他の動物の皮の下に入ると、その動物になることができるし、自分の姿を隠すことができるという考えが広くゆきわたっていた。北欧神話の主神オーディンらが他のものの皮の下に入ると姿が隠れるというのはこれである。隠れ蓑の起源もこのような皮衣にあったと考えられる。人は旧石器時代から毛皮を着たが、日常の用以外に着用するときは、その動物になりきり、その動物の世界に参入することであった。その動物が食用になるものであれば、食糧の供給源として感謝と尊敬を捧げたことであろう。狩猟獣の肉を食べたあと、骨を余すところなく保存し、皮に包むと、その動物はどこかで再び生まれ、人間に再び食べられにやって来るという信仰は、狩猟民にはかなり広く見られるものである。いっぽう、漁撈民の間では、魚の骨を小骨一本損ずることなく、海や川に戻してやると、それらに再び肉が付いて、人間に食べられるためにやって来るという信仰がある（フレイザー『金枝篇』第5部『穀物と野性動物の靈魂』第2巻、256頁以下）。魚の場合は、皮は失われて骨だけしか残らないが、獣の場合は皮と骨の両方が残る。骨の再生力はもちろんのこと、外面を形成する皮にも再生力があつたと信じられたに違いない。

人間が獣皮を被るのは、骨に皮を被せるのとは違い、生きた人間を別の生物に移して変身させることであつた。文化ごとにそれは別々の形をとって発展していったのである。